

**[D年] 棕櫚の主日(2024年3月24日)**

**【入堂行進】ゼカリヤ書 9章9～10節**

9 娘シオンよ、大いに踊れ。  
娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。  
見よ、あなたの王が来る。  
彼は神に従い、勝利を与えられた者  
高ぶることなく、ろばに乗って来る  
雌ろばの子であるろばに乗って。  
10 わたしはエフライムから戦車を  
エルサレムから軍馬を絶つ。  
戦いの弓は絶たれ  
諸国の民に平和が告げられる。  
彼の支配は海から海へ  
大河から地の果てにまで及ぶ。

**【入堂行進】ヨハネによる福音書 12章12～16節**

12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、<sup>13</sup>なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。  
「ホサナ。  
主の名によって来られる方に、祝福があるように、  
イスラエルの王に。」  
14 イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。  
15 「シオンの娘よ、恐れるな。  
見よ、お前の王がおいでになる。  
ろばの子に乗って。」

16 弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。

**【旧約聖書日課】創世記 22章1～18節**

1 これらのことの後で、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、<sup>2</sup>神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」<sup>3</sup>次の朝早く、アブラハムはろばに鞍を置き、献げ物に用いる薪を割り、二人の若者と息子イサクを連れ、神の命じられた所に向かって行った。<sup>4</sup>三日目になって、アブラハムが目凝らすと、遠くにその場所が見えたので、<sup>5</sup>アブラハムは若者に言った。「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていないさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」<sup>6</sup>アブラハムは、焼き尽くす献げ物に用いる薪を取って、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。二人は一緒に歩いて行った。<sup>7</sup>イサクは父アブラハムに、「わたしのお父さん」と呼びかけた。彼が、「ここにいる。わたしの子よ」と答えると、イサクは言った。「火と薪はここにありますか、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか。」<sup>8</sup>アブラハムは答えた。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる。」二人は一緒に歩いて行った。<sup>9</sup>神が命じられた場所

に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。<sup>10</sup>そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。<sup>11</sup>そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、<sup>12</sup>御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」<sup>13</sup>アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。<sup>14</sup>アブラハムはその場所をヤーウエ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けた。そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり（イエラエ）」と言っている。<sup>15</sup>主の御使いは、再び天からアブラハムに呼びかけた。<sup>16</sup>御使いは言った。「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったので、<sup>17</sup>あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。<sup>18</sup>地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

**【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 10章11～25節**

11 すべての祭司は、毎日礼拝を献げるために立ち、決して罪を除くことのできない同じいけにえを、繰り返して献げます。<sup>12</sup>しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、<sup>13</sup>その後は、敵どもが御自分の足台となってしまうまで、待ち続けておられるのです。<sup>14</sup>なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。<sup>15</sup>聖霊もまた、わたしたちに次のように証ししておられます。

16 「『それらの日の後、わたしが彼らと結ぶ契約はこれである』と、主は言われる。  
『わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いにそれを書きつけよう。』  
17 もはや彼らの罪と不法を思い出しはしない。』  
18 罪と不法の赦しがある以上、罪を贖うための供え物は、もはや必要ではありません。

19 それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入ると確信しています。<sup>20</sup>イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。<sup>21</sup>更に、わたしたちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから、<sup>22</sup>心は清められて、良心ののがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか。<sup>23</sup>約束してくださったのは真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかりと保ちましょう。<sup>24</sup>互いに愛と善行に励むように心がけ、<sup>25</sup>ある人たちの

習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合ひましょう。かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、ますます励まし合おうではありませんか。

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 18章1～40節

1こう話し終えると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロン谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。2イエスを裏切ろうとしていたユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと共に度々ここに集まっておられたからである。3それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやって来た。松明やともし火や武器を手にして持っていた。4イエスは御自分の身に起こることを何もかも知っておられ、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。5彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。6イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。7そこで、イエスが「だれを捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスだ」と言った。8すると、イエスは言われた。「『わたしである』と言ったのではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。」9それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした。」と言われたイエスの言葉が実現するためであった。10シモン・ペトロは剣を持っていたので、それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右の耳を切り落とした。手下の名はマルコスであった。11イエスはペトロに言われた。「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」

12そこで一隊の兵士と千人隊長、およびユダヤ人の下役たちは、イエスを捕らえて縛り、13まず、アンナスのところへ連れて行った。彼が、その年の大祭司カイアファのしゅうとだったからである。14一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言したのは、このカイアファであった。

15シモン・ペトロともう一人の弟子は、イエスに従った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ったが、16ペトロは門の外に立っていた。大祭司の知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れた。17門番の女中はペトロに言った。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは、「違う」と言った。18僕や下役たちは、寒かったので炭火をおこし、そこに立って火にあたっていた。ペトロも彼らと一緒に立って、火にあたっていた。

19大祭司はイエスに弟子のことや教えについて尋ねた。20イエスは答えられた。「わたしは、世に向かって公然と話した。わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。21なぜ、わたしを尋問す

るのか。わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々がわたしの話したことを知っている。」22イエスがこう言われると、そばにいた下役の一人が、「大祭司に向かって、そんな返事のしかたがあるか」と言って、イエスを平手で打った。23イエスは答えられた。「何か悪いことをわたしが言ったのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか。」24アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアファのもとに送った。25シモン・ペトロは立って火にあたっていた。人々が、「お前もあの男の弟子の一人ではないのか」と言うと、ペトロは打ち消して、「違う」と言った。26大祭司の僕で、ペトロに片方の耳を切り落とされた人の身内の者が言った。「園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか。」27ペトロは、再び打ち消した。するとすぐ、鶏が鳴いた。

28人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。29そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。30彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。31ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。32それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。33そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。34イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」35ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」36イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」37そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」38ピラトは言った。「真理とは何か。」

ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前へ出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。39ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」40すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ  
省略

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・3月24日「棕櫚の主日」の日課主題は「十字架への道」。「棕櫚の主日」は、「受難節」の最後の主日で、いわゆる「受難週」の始まりの主日。「受難週」は、主イエスが最後にエルサレムに入られて逮捕、裁判の末に十字架につけられて死に、葬られた一連の出来事を記念するときとして、キリスト教会で最初期に慣習化された教会暦の一つ。「受難節」は、この「受難週」を拡大する形で定められてきた。「受難週」は、伝統的な教会では「聖週(聖なる一週間)」と呼ばれる。

・「棕櫚の主日」は、伝統的な教会の礼拝では、主イエスのエルサレム入城を記念して、礼拝(ミサ)の冒頭は聖堂外に一同が集合して始め、棕櫚の枝を掲げながら聖堂外周を行進した後に入堂する儀礼を受け継いできた。この行進儀礼に対応する日課を、教団の主日聖書日課表では「入堂行列」として示している。

・「入堂行進」の日課は、旧約の「ゼカリヤ書」から、ロバに乗って凱旋行進する王の姿を告げる預言の箇所、福音書の「ヨハネによる福音書」から、主イエスのエルサレム入城の出来事を伝える箇所。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、アブラハム物語中にある「イサク奉獻の説話」の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、礼拝集会を怠らずに続けることを説く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスの逮捕・裁判の出来事を伝える箇所。

入堂行列・旧約(ゼカリヤ9章より)

・「ゼカリヤ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四部「(十二)小預言者」の11番目に置かれた預言書。本書は、バビロン捕囚解放後のペルシア支配下に帰還再建されようとしていたエルサレム・ユダヤ共同体で「預言者」として活動した「ゼカリヤ」の預言集として編纂されている。同時期に同じ働きを担っていた預言者「ハガイ」の預言書として、「ハガイ書」も「小預言者」の10番目に置かれている。また両預言者の名は、「エズラ記」(5:1、6:14)および「ネヘミヤ記」(12:16)でも並んで挙げられている。おそらく、エズラ、ネヘミヤらのようにペルシア王の家臣として仕えるようになっていたユダヤ人集団に属する祭司身分出身の「御用預言者」だったのだろう。

・前7世紀中葉に登場したペルシアは、当時のオリエント世界で初めてほぼ全域を統一的に支配する空前の世界帝国であった。そのペルシア王のもとで実現したユダヤ帰還事業は、遠い地に君臨する絶対的主君であるペルシア王の名によって派遣されてきた非軍事的権力者としての総督・大祭司を「平和の使者」として受け入れることであった。ゼカリヤの預言には、宗教的な装いの裏に世俗的現実が見え隠れしている。

入堂行列・福音書(ヨハネ12章)

・「ヨハネによる福音書」が伝える主イエスの「エルサレム入城の逸話」は、他の共観福音書が伝えるような「ろば」入手にまつわる逸話が省かれている一方で、「マタイ」同様に「ろば」使用に関する旧約預言(ゼカリヤ9:9)を引用してその聖書的意義を弟子たちの教会が理解したことを付言している。また、「ヨハネ」は、日課箇所が続く節(17~18節)で、このとき主イエスを群衆が出迎えたのは、「ラザロの復活」の出来事に立ち会っていた群衆がそのことを証言していたからだとして説明している。「ヨハネ」は、「ラザロの復活」の出来事と「主イエスの受難物語」を一体の出来事として扱っているのである。

旧約日課(創世記22章より)

・「創世記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第一巻で、天地創造から始まる「原初の物語」と、「イスラエル」の民族的始祖と位置づけられる「族長らの物語」によって構成される。日課箇所は、「族長物語」の第一部「アブラハム物語」の中に置かれた「イサク奉獻の説話」。

・この説話物語は、最初に「神(エロヒム)」がアブラハムに語りかけるところから始まるが、物語が進行していくと「主の御使い(マラク・アドナイ(=ヤハウェ))」がアブラハムに語りかける者として示される。「アブラハム物語」では、「神」と「主の御使い」は同一視されていると解される例が少なくない(18章なども参照)。

・「イサク奉獻」の説話物語は、「新約」において「父」である神が「御子」であるイエスを犠牲として十字架につけさせられた出来事という神学的理解を基礎づける予型として解せられてきた。初代教会および「新約」著者にそのような明確な予型論的理解があったかは不明だが、旧新約を一体の「聖書」として理解する上では、無視できない解釈である。

使徒書日課(ヘブライ10章)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約中で「パウロ書簡集」と「公同書簡集」の間に置かれた書簡文書。末尾は書簡形式を保持しているが、本来冒頭にあるべき差出人、宛名人、挨拶といった定型句を欠いている。東方教会では「パウロ書簡集」に含める習慣があるが、西方教会では早くから「パウロ書簡集」に数えることに否定的な考えが示されてきた。本書簡は、教会の現場で実際に起こっている問題を具体的に取り上げることはなく、聖書(旧約)の「大祭司」観に基づいて主イエスを「真の大祭司」と位置づけ、「律法」が定めている大祭司が「贖罪日」(レビ記16章)に執行する「毎年の民の贖罪のための犠牲奉獻」を、「天の大祭司」である主イエスが「天上の幕屋」でただ一回ご自身を「犠牲(いけにえ)」として奉獻して完成された、という贖罪神学を展開している。新約中、明確な聖書的贖罪論を展開しているのは、本書簡のみである。日課箇所は、これを踏まえた勧めとなっている。

**福音書日課(ヨハネ 18 章より)**

・日課は 18 章全体を指定しており、ここに、主イエスの逮捕とペトロの否認の逸話、また大祭司およびピラトによる裁判の大半が含まれる。

・「逮捕」の場面を、「マタイ」と「マルコ」は「ゲッセマネという所」とし、「ルカ」は「オリーブ山」の「いつもの場所」とするが、「ヨハネ」は「キドロンの谷の向こう」にある「園」としている。これらが同一場所を指しているという理解から、通説では「オリーブ山にあるゲッセマネ(搾り場)のある園」が逮捕の場と言われてきた。「キドロンの谷」は、エルサレムの町が建つ丘(シオン)と「オリーブ山」を隔てる谷を指すと考えられ、オリーブの木が栽培されている山の麓、街道沿いに「搾り場(ゲッセマネ)」があったとみなされている。共観福音書は、その場所で弟子たちを伴った主イエスが「祈り」をされたと伝えているが、「ヨハネ」は主イエスの「祈り」をその場の出来事としてはいない。「ヨハネ」の場合、「洗足」の出来事の場面としての「最後の晚餐」を 13～14 章で描き、15～17 章はそこから逮捕現場までの道中に語られたこととして展開させている。17 章にあるいわゆる「大祭司の祈り」は、まだ「園」に着く前の場面であるが、おそらく共観福音書の描く「ゲッセマネの祈り」に相当するものとして代替しているのだろう。共観福音書が「ゲッセマネの祈り」で描く主イエスの逡巡を、「ヨハネ」は、12:27 で示唆している。

・5 節/6 節/8 節「わたしである」は、「エゴ・エイミ」の訳。この表現は、4:26 でも同じ訳でみられ、8 章では「わたしはある」の訳で繰り返しみられる(8:26、8:28、8:58)。ただし、この表現は補語を伴った「エゴ・エイミ・○○」で「わたしは○○である」という意味になるもともと基本的な構文で、各福音書で多数みられる。

・弟子のペトロが逮捕された主イエスを追って「大祭司の屋敷」まで付いて行ったことは、「共観福音書」も伝えるが、「ヨハネ」は、「もう一人の弟子」が同行していたとしている(15 節)。しかも、この弟子は「大祭司の知り合いだった」としており、主イエスの弟子たちの中に当時のユダヤ人社会で権力の中核にあった者と特別な関係にある者がいたことを明らかにしている。この弟子が「ヨハネ文書」を生み出した「ヨハネ共同体」の指導者「ヨハネ」であったとすると、このグループが初期教会においてユダヤ人社会の中で特異な存在であったであろうことが推認される。たとえそのような人物の一致が当てはまらないとしても、主イエスと弟子たちの集団が、実はユダヤ人社会の支配層と非常に近いところで活動していたということになる。主イエスが十字架刑へと追い込まれたことや、その後の弟子たちの活動(初期教会)が被った迫害(使徒 12 章など)も、ある意味ではユダヤ人社会内での権力闘争に巻き込まれた結果であったのだろう。ちなみに、「ヨハネ」は、共観福音書が取り上げる「ヘロデ」の名を、「大王」にしる「アンティパス」にしる、一度も取り上げていない。

・28 節には、ユダヤ人らが総督官邸に入らなかったのは「汚れないで過越の食事をするためであった」としており、この時点でまだ「過越の食事」の時日になっていないものとしている。「共観福音書」は、主イエスが逮捕される前の「最後の晚餐」を「過越の食事」として明示しているが、「ヨハネ」は異議を唱えている。「ヨハネ」は、主イエスを「過越の小羊」として神学的に位置づけるために、十字架の出来事が起こった日を「準備の日(小羊を屠る日)」として設定しようとしている。

・総督ピラトの尋問の中に描かれる主イエスとの「真理(アレテイア)」を巡る対話は、他の福音書が伝えていない。「真理」は、「共観福音書」ではそれぞれ 1～3 例しか見られない用語だが、「ヨハネ」は 25 例あり、主イエスを巡る理解において重要な鍵語となっていると考えられる。他方で、「パウロ書簡集」にも多用されており、パウロのグループと「ヨハネ共同体」との間での何らかの論争を背景に意識的に用いられている可能性も考えられる。

**来週の誕生日(3月24日～30日)**

**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-309 番「あがないの主に」(= I 129 番「あがないぬしに」を改訳)の歌詞は、マタイ 21:6～11 に基づく古いラテン語聖歌で、多くの旋律で歌われてきた(21～308 番は同じラテン語原詞の別訳)。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家テシュナーが別のドイツ語讃美歌のために作曲したもの。
- ・21-305 番「イエスの担った十字架は」は、現代オランダの牧師で現代語訳詩編歌や讃美歌集編纂にも携わったバルナルトの作詞(独語訳版からの重訳)。曲は、オランダのカトリック司祭シュッターの作曲。
- ・21-522 番「キリストにはかえられません」(= II 195)は、20 世紀に入ってから作られた後期福音唱歌の一つ。作詞者レア・ミラーについては不詳。作曲は、自由メソジスト教会牧師の家に生まれた音楽伝道者でピリー・グラハムと共に放送伝道や大衆伝道に従事した G・ビヴァリー・シェーの作曲。
- ・21-284 番「荒れ野の中で」は、受難節の讃美歌として英米の讃美歌集で広く採用されている。作曲は、19 世紀インド生まれの聖職者スミタンとなっているが、フランス・ポットが大幅に改作した詞が広く用いられている。

**21-284「荒れ野の中で」**

**Forty days and forty nights**

1. Forty days and forty nights / you were fasting in the wild; / forty days and forty nights / tempted, and yet undefiled.
2. Shall not we your sorrow share / and from worldly joys abstain, / fasting with unceasing prayer, / strong with you to suffer pain?
3. Then if Satan on us press, / flesh or spirit to assail, / victor in the wilderness, / grant that we not faint nor fail!
4. So shall we have peace divine: / holier gladness ours shall be; / round us, too, shall angels shine, / such as served you faithfully.
5. Keep, O keep us, Savior dear, / ever constant by your side, / that with you we may appear / at the eternal Eastertide.